広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第50号　2001　235－240

日本とハンガリーにおける大学院教育と論文作成

サボー・オルショヤ

(2001年9月30日受理)

Graduate Education and Dissertation Writing in Japan and Hungary

Orsolya SZABO

Although demand for experts holding doctor's degree has grown continually, the Graduate Education on Doctor's Level is the most problematic part of the higher education all over the world.

Based on faculty and graduate student surveys conducted in both countries, this paper analyzes duration of doctoral study and "All But Dissertation" students. It was found that it is very difficult for graduate students to get Ph.D. within formal years of schooling in both countries. Then the obstacles of them are analyzed: formal regulations, programs, students, research guidance by faculty adviser, financial support.

Outline of the new Hungarian graduate school system, which started in 1993 is also shown and discussed.

Key word : Graduate Education, Doctoral Dissertation, Research Guidance
キーワード：大学院教育、博士論文、研究指導

1　問題と方法

1-1　問題設定

学術・科学技術の振興は、将来の経済社会の発展にとって極めて重要な事項であり、その手段として大学院レベルでの高度な専門教育や研究活動の拡充発展が図られるようになってきた。従来大学院制度をもたないヨーロッパ諸国ではアメリカ的な大学院制度を創設するようになっている。戦後改革で大学院制度を整備した日本では1990年代以降、大学院重点化政策など大学院教育の量的質的な拡充が図られている。

しかし未解決の問題が残されていることも事実である。大学院教育や学位授与など内容面での問題はそのひとつである。たとえば、日本における博士号取得者数は、1996年度1年間で約1万4千人で論文博士と課程博士が約半数づつである。欧米流の観点からすれば、博士号授与数は年間7千人程度であり、必ずしも多いとはいえない。課程博士の多数輩出は、大学院教育を実質化させ、学術水準の向上に寄与する。博士課程後期段階での教育の充実は今後の大きな課題である。ハンガリーにおいては、1993年より組織化された大学院教育（3年課程）が始まったが、新しい大学院教育の批判的検討がいま必要とされている。

そこで、本論文では、大学院博士課程における教育、特に博士号取得に必要な年数と博士号取得困難の原因を、日本とハンガリーでの質問紙調査から国際比較分析を行う。

1-2　対象と方法

大学院教員調査（日本）

西日本の2つの国立総合大学の大学院担当教授695名を対象に2000年12月から2001年1月、および2001年7月に質問紙調査を行った。質問内容は、授業の担当状況、大学院教育の目的、大学院教育のカリキュラム、学位論文の性格と水準、学位論文受理の前提条件等である。有効回収数は167、回収率は24.0%であった。

大学院学生調査（日本）

西日本の2つの国立総合大学の大学院学生約1816人を対象に質問紙調査を行った。先の教員調査で対象となった担当教授を介して配布を依頼した。実施時期は教員調査と同じである。質問内容は、大学院への進学動機、大学院教育の実態、学位論文につながる研究活

動と研究指導、学習・研究活動の条件、財政状況等である。有効回収数は269、回収率は14.8%であった。

大学院教員調査（ハンガリー）

ハンガリーの１大学の大学院担当教員240人を対象に2001年４月と５月および７月に日本の教員調査と同様の質問紙調査を行った。回収数は114、回収率は47.5%であった。

大学院学生調査（ハンガリー）

ハンガリーには21校に大学院がある。本調査では2000年２月から３月にかけて13校に学生調査質問紙の配布を依頼し、主に博士課程２年生以上の者954人から回答を得た。

表１　回答者数の専門分野内訳

	日本		ハンガリー	
専門分野	教員	学生	教員	学生
人社系	33	34	43	354
教育系	12	36	0	0
理学系	34	49	16	171
工学系	34	66	17	162
農学系	19	45	10	76
医歯系	28	32	19	162
その他	7	7	9	29
全体	167	269	114	954

(注)日本の両調査では農学系は薬学や看護学等を含み、ハンガリーの院生調査では人社系は教育を含み、医歯系は薬学を含む。

2　ハンガリーの新しい大学院制度

2-1　新しい大学院制度の法的枠組

1993年度から、新しい高等教育法に基づいて米国式の大学院が設立されるようになった。組織化された博士課程教育の絶対必要条件は法的に厳しく定められている。しかしハンガリーの大多数の大学は、数十年前からのエリート的な教育を行い相対的に質の高い教育を行なってきたので、これらの法律の前提条件を満たしている。

大学院を設立しようとする大学は以下の法的条件を持つべきである。

1）大学院教育のインフラストラクチャー（必要基盤施設）や物質的諸条件
2）大学院教員の６割以上（又は６人以上）が教授であること
3）研究大学（Research University）という性格を持つこと

大学院への志願者の法的必要条件：

1）大学卒業証明書で記入している総成績が４（日本の“良”と等しい）以上であること
2）教授または大学外の専門家から推薦された専門的研究プログラムを持つこと
3）一つ以上の中級外国語能力（国家試験に合格）を持つこと
4）専門に関する入学試験（筆記と口頭試験）に合格すること

院生は３年制博士課程在学中に以下の資格を満たすべきである。

1）大学院が定めた単位数を取得すること
2）大学（院）で授業を担当すること（T.A.）
3）二つ以上の執筆物・小論文（その内一つは博士論文のテーマと異なること）
4）研究に基づく博士論文（量的必要条件はないが、高い質が重要な条件である）

なお、1993年の新高等教育法により、博士課程は原則３年制であるが、優秀者は必要条件（単位数、授業担当、執筆物）を満たせば、入学１年後に博士号を取得できる。

博士号取得の必要条件は以下のとおりである。

1）博士論文の公式口頭弁論
2）専門的試験（いわゆる博士号試験）
3）二つの中級外国語国家試験

新しい組織化された大学院（博士課程）のほかに、博士号取得経路の“古い道”である、前政治体制が制定した称号（Candidate of Sciences や Doctor of Sciences）も残存している。それらがイデオロギー性を失いつつも今日でも存在していることがハンガリーの博士課程教育の特徴である。この二つの称号を持つ博士らは、大学の博士号を与える権利を持つ議会・委員会に自分の称号を博士号（Ph.D.）に変更する要請権がある。

新しい大学院制度は、以前の諸問題（予期・予測できないこと、不規則性など）を解決した。今日では政治的・イデオロギー的スタンダードの代わりに経済的市場的基準が博士号という学位の労働市場と学界における価値を、また科学的学問的評判・名声を、定めるといえる。新高等教育法などの中央法は、前体制の“個人的な”差別的決定メカニズムを絶対廃止する。

2-2　現在の大学院教育

ハンガリーの大学院とそこでの博士課程教育は、博士号学位を取得するためだけでなく、ハンガリーの学問・科学界のためにも非常に重要である。学問的科学的研究活動の３分の２は、知的勢力・資本や研究活動のためのインフラストラクチャーや研究成果を含めて、大学（院）に集中しているからである。

現在、2000および2001年度における組織的統合のた

め、21の大学に学問分野別に設置した大学院がある。21校のうち、17校は国立大学（うち４校は美芸術大学で、Ph. D 学位でなく DLA 学位を授与する）であり、４校は教会立大学である。博士課程入学者のリミット（法律によって定められた１年生数）は850人である。

2001年度現在、ハンガリーのすべての大学院では約8000人の大学院学生が昼間教育課程、通信教育課程、個人教育課程で学んでいる。しかし２ヶ以上の外国語能力試験、専門的な執筆と口頭試験、掲載、博士論文とその口頭弁論などの厳しい法的な諸条件があるので、毎年おおよそ300人しか博士号を取得できない。

1993年度から実施されている新しい３年制大学院では、1996年１月から2000年11月までの期間で1371人が博士号学位を取得した。同じ期間に、別の学位取得方法、つまり、ハンガリー科学学士院とその資格獲得委員会が授与した博士号を取得した者は3358人にのぼる。

表２　専門分野別の博士号学位取得者数（1996-2000年度）

専門分野	３年制課程博士	論文博士
人社系	309	953
理学系	464	1,236
工学系	189	581
医歯系	309	384
農学系	98	145
その他	2	59
合計	1,371	3,358

表３　ハンガリーの大学院学生数（1996/2000年度）

３年制博士課程(昼間、通信教育課程	3,651
３年制博士課程(個人教育課程)	4,063
３年制博士課程の合計	7,714
２年制 DLA(美芸術博士)課程(昼間、通信教育課程)	144
２年制 DLA(美芸術博士)課程(個人教育課程)	79
２年制 DLA(美芸術博士)課程の合計	223
全大学院学生数	7,937
個人教育課程(３年制と２年制)	4,142
個人教育課程の院生のうち高等教育機関	1,722

ハンガリーの政府は、文部科学省を通して教育に関する改革・刷新の時には常に大学院教育に重点を置いてきた。政府の努力は二方向である。一つは、博士号学位取得者（Ph. D Degree Holder）の最適数という社会的需要を満たすことである。前政治社会体制時に過剰に政治化され法律的に統制されない制度の代わりに、現代的民主主義的な科学と経済の指示・指標にされた博士課程という構造・機構の設置・創設は一段と重大であった。二つは、前体制のエリート的教育を保持・維持したかった。新しい３年制大学院でも高い水準を維持して、大学院を学問的科学的研究の“ベース”として扱った。

学問的科学的ハイレベルを目指す教育政策とともに、政府は経済的支持も行ってきた。つまり教育機関である大学院は政府から無視し得ない金銭的援助を受け、大学院学生は政府から奨学金を給付されている。

3　博士論文の完成に必要な年数

博士課程後期の標準的な修業年限は、両国とも３年（日本の医学と歯学のみ博士課程のみ４年）だが、果たして博士号を取得するのに十分なのだろうか。もし不十分だとしたら、実際には何年必要なのか。

3-1　大学院学生の意見

まず、大学院学生の意見を調べてみよう。日本の場合、表４より、理学、工学、農学、医歯の理系４分野はすべて３年かかると答える者が過半数を超えている。これに対して人文社会と教育では４、５年と答える者が最も多い。文系と理系で意見が分かれている。他方、ハンガリーの結果は表５に示している。ここではどの分野でも４、５年が圧倒的に多くなっている。

表４　博士号を取得するまでに何年必要ですか.
（日本、%）

学生	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
３年	7	19	65	74	55	56	50
４、５年	59	53	35	26	37	41	41
６年以上	34	28	0	0	6	0	9

表５　博士号を取得するまでに何年必要ですか.
（ハンガリー、%）

学生	人社	理学	工学	農学	医歯	全体
３年	21	13	10	9	15	17
４、５年	68	80	86	84	81	76
６年以上	12	7	5	7	4	8

日本の学生についてやや詳細な分析をしてみよう。表６は理系を中心に大学院学生は在学中の課程博士取得を比較的楽観的に見ており、「十分に可能」「努力すれば可能」と答える者が多い。これに対して、人社系、教育系では、「努力すれば可能」が最も多いが、「難しい」と答える者の割合が多く、全体の４分の１程度を占めている。

また、日本では、学位論文に関する研究は、医歯系や理学系では博士課程（後期）入学後に開始し、それ以外の分野では修士論文段階から開始するケースが多い。

表6　あなたの専攻分野では博士課程在学中に課程博士を取得する見込みはどの程度ありますか(学生、%)

日本	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
十分に可能	13	17	23	28	30	28	26
努力すれば可能	63	57	74	66	53	69	63
難しい	23	26	3	6	17	3	11

表7　学位論文に関する研究は事実上、いつはじめましたか.　(学生、%)

日本	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
学部時代の卒論	14	8	5	26	15	3	14
修士論文	48	53	41	37	40	0	37
博士課程入学直後	21	28	46	35	31	84	40
博士課程でのテーマ審査後	3	5	0	3	7	9	4

3-2　教員の意見

しかし教官の結果は異なる。日本では（表8）分野により違いが大きく、医学・歯学では教員回答者全員が修業年限内の3、4年と答えており、工学でも極めて大多数が3年ないし5年と答えている。しかしそれ以外の分野では過半数の者が4年以上と答えており、3年で可能と考えている者は3分の1以下にすぎない。

ハンガリーでも標準的な修業年限3年で課程博士が取得できると考える者は3分の1以下である。医歯系では日本と対照的に5年前後かかると考えている教員が多い。

表8　博士課程を取得するまでにそのテーマを正味何年くらい研究しますか　(%)

日本：教員	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
3年	15	10	35	43	16	55	32
4年	7	10	16	16	10	37	19
5年	26	50	29	36	58	7	31
6年	19	30	16	0	16	0	11
7年	26	0	3	3	0	0	1
8年	7	0	0	0	0	0	0

表9　博士号を取得するまでに何年必要ですか.（%）

ハンガリー：教員	人社	理学	工学	農学	医歯	全体
3年	30	19	24	20	37	29
4、5年	53	50	59	70	47	54
5、6年	16	25	17	10	10	15
7年以上	0	6	0	0	5	2

在学中に課程博士を取得する者の割合にも両国に違いがある。日本では（表10）、工学・農学・医歯系では入学者の大多数が課程博士を取得していると答えているが、人文社会、教育、理学系では取得の割合は低い。

これに対して、ハンガリーでは（表11）どの分野でも3年間で課程博士を取得する者の割合は極めて低くなっている。

以上の結果から、ハンガリーでは日本以上に課程博士の取得が難しいといえる。

表10　課程博士を取得する者の割合　(教員、%)

日本	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
—20%	33	44	9	10	5	4	14
—40%	12	0	3	0	5	0	5
—60%	29	22	18	16	5	4	16
—80%	8	11	30	6	0	7	12
—100%	16	22	39	68	84	85	55

表11　3年間で課程博士を取得する者の割合(教員、%)

ハンガリー	人社	理学	工学	農学	医歯	全体
—20%	28	50	41	20	10	29
—40%	37	38	12	20	37	29
—60%	28	13	29	40	47	32
—80%	7	0	18	20	5	10
—100%	0	0	0	0	0	0

4　博士号取得困難の原因

博士号取得はなぜ難しいのだろうか。どのような障壁があるのだろうか。まず、日本について院生調査の結果を見てみよう（表12)。「研究成果を期間内に出すこと」が最も大きな障壁であることがわかる。その他、文系では「学位論文が長いこと」「論文提出の前提条件が高すぎること」、理系では「修士論文のテーマと一貫

表12　博士号の取得が困難だとすれば、どの程度影響しているか。　(日本、学生、%)

「非常に」＋「少し重要」	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
成果を期間内に出すこと	87	91	91	87	81	69	83
論文が長く時間がかかる	43	51	24	31	25	24	33
論文の要求水準が高すぎる	53	40	26	33	25	28	35
論文提出の前提条件が高い	47	66	44	54	58	24	52
博士号の水準が曖昧	10	20	15	20	39	24	22
自分のテーマ設定が曖昧	33	57	41	43	42	24	41
学部時代の学習が不十分	50	54	44	40	47	41	44
修論のテーマと一貫していない	27	34	32	41	47	14	32
博士号取得の意欲が弱い	33	34	44	36	44	28	36
外国語の試験への合格	3	9	3	4	11	10	6
家族を抱えていること	17	14	9	16	25	24	16
アルバイト	23	31	15	10	17	38	20
企業等で仕事を抱えている	13	14	3	17	14	21	13

していない」「博士号取得の目標達成の意欲が弱い」等も多い。医歯系ではアルバイトや本業を抱えていることもあがっている。

ハンガリーについては、質問項目数は少ないが教員と学生に回答を求めている（表13）。学生よりも教員の方が厳しい評価をしている。所定の年限内に博士号を取得できない理由として、「論文執筆に長い時間がかかる」「基礎的専門知識が不十分」といった論文の内容や水準に関わる障壁が指摘されている。「外国語能力が不十分」という理由は、大きな数字になっているが、これは同国で法律によって２つ以上の外国語能力試験が大きな重荷になっていることを示している。これは「論文提出の前提条件」の一つと考えることもできる。

表13　課程博士在学期間延期の原因（ハンガリー、%）

		人社	理学	工学	農学	医歯	全体
論文執筆に時間がかかる	学生	71	36	39	46	30	49
	教員	95	100	100	100	95	96
論文提出の前提条件	学生	10	15	30	10	14	16
	教員	42	62	18	20	42	36
基礎的専門知識が不十分	学生	38	9	35	29	40	32
	教員	72	75	100	20	95	75
外国語能力が不十分	学生	40	53	44	16	33	40
	教員	91	81	76	100	89	89
家庭・職場・金銭的困難	学生	49	55	22	25	41	41
	教員	67	69	94	80	89	78

4-1　教員から見た大学院学生の資質

教員は、大学院学生の資質をどのようにみているのだろうか。日本の教員は、大学院（博士課程前期）に入学してくる学生の読み書き能力や教養的知識の不足に不満をもっている。表14に示しているように、外国語については52%、作文については54%もの教員が不満と答えている。また、専門分野の知識（28%）に比べて教養的知識（41%）に大きな不満をもっている。全体として、日本の大学教員の院生に対する批判は非常に大きい。これはハンガリーと比べると、際立った特長となっている。

ハンガリーの教員は、日本よりも院生の教養的知識と専門分野の知識に満足しており、論文作成資質と創造性・思考力にもだいたい満足している。外国語能力と研究者としての資質についてはやや不満の程度が大きいが、日本に比べれば非常に小さい。

この違いは、両国の大学制度の違いと質問文の違いによるところも大きいと考えられる。質問文では日本では博士課程前期の学生について評価を求めたが、しかも近年、この段階は規模が拡大し大衆化が著しい。ハンガリーでは学部教育の水準がドイツと同様、日米の修士課程と同等レベルとなっており、大学院は博士課程のみである。日本の博士課程前期とハンガリーの博士課程を直接比較するのはアンフェアかもしれない。

表14　大学院に入学してくる学生の力量：「不満」の%

日本	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
外国語	53	42	70	53	52	33	52
作文	37	50	66	50	74	48	54
専門分野の知識	28	25	27	29	35	21	28
教養的知識	37	50	42	50	43	29	41
研究者としての資質	28	42	15	23	26	21	24
思考力	37	33	39	29	43	14	33
ハンガリー	人社		理学	工学	農学	医歯	全体
外国語	16		25	35	10	26	23
作文	23		6	6	20	10	14
専門分野の知識	12		19	12	0	10	12
教養的知識	7		12	0	10	0	8
研究者としての資質	19		50	23	0	21	23
思考力	16		19	0	0	10	12

4-2　研究指導

日本の大学院学生は文系では約60%以上が月に１、２回ないし年に１、２回、指導教官と博士論文のテーマに関して相談をしている。理系ではもっと頻繁であり、約60%以上が週１回ないし月１、２回程度相談をしている（表15）。

表15　博士論文に関する指導教官との相談回数
（日本、学生、%）

	人社	教育	理学	工学	農学	医歯	合計
週1回	17	37	38	40	33	66	39
月1、2回	37	31	47	41	33	14	18
年1、2回	27	31	3	13	25	17	17
殆んどない	10	0	12	3	8	3	5

ハンガリーの大学院学生は、文系（人社系）では月１回以上が77%にものぼり、日本よりも親密である。理系では農学を除いて月１回以上が約60%以上になる（表16）。理系については両国で大きな違いはないといってよい。

表16　博士論文に関する指導教官との相談回数
（ハンガリー、学生、%）

	人社	自然	医歯	工学	農学	合計
週1-2回	19	18	30	26	8	21
月1回	58	43	52	34	15	45
2-3ヶ月に1回	9	25	10	27	4	15
半年に1回	11	11	6	14	58	14
分からない	3	3	2	0	14	4

ハンガリーの大学院学生の51%は指導教官との相談の機会に満足している（表17）。彼らの約66%は月１回以上指導教官と会って相談し、また同率で指導教官との個人的専門的関係を良いと判断した。一方、日本人学生の約８割は同じ判断をしたのである。

大学院教員側の回答には、どちらの国でも、同じ結果がみられる。というのは、両国でも、月１回の相談は望ましいといえる。

表17　指導教官との関係の評価

（ハンガリー、院生、%）

	人社	自然	医歯	工学	農学	合計
とても良い	23	11	24	18	11	19
良い	58	35	48	44	20	46
ふつう	12	40	19	32	59	26
良くない	2	11	2	3	1	5
分からない	4	4	7	3	0	4

4-3　学位論文のテーマ選択

両国とも、多くの分野で、博士学位論文のテーマの決定に関しては、教員と院生が相談して決めるパターンが最も多い。また文系では大学院学生自身がテーマを選ぶことが多い。しかし、両国で大きく異なっている点がある。それはハンガリーでは「テーマを教員が設定することが多い」を選択する教員が皆無であることである。これに対して日本では、工学や農学をはじめとする理系ではかなり多くみられる。

表18　学位論文のテーマはどのように選びますか

（教員、%）

		人社	教育	理学	工学	農学	医歯	全体
院生の方が選ぶ方が多い	日本	59	42	0	3	0	7	16
	ﾊﾝｶﾞﾘｰ	35		32	24	20	11	26
教員と院生で相談して決める	日本	38	50	76	38	43	62	52
	ﾊﾝｶﾞﾘｰ	65		63	76	80	89	73
教員が設定することが多い	日本	3	8	24	59	57	31	32
	ﾊﾝｶﾞﾘｰ	0		0	0	0	0	0

5　まとめ

両国の大学と大学院の制度は大きく異なっている。すなわち、基本的に日本の制度はアメリカ的な制度であるが、ハンガリーの制度はドイツ的な制度である。両国の比較は、post-graduate レベルの教育のアメリカモデルとドイツモデルを比較することでもある。そのことを反映して、大学院教育の多くの側面で大きな違いが見られた。

とはいえ、多くの相違がみられる反面、共通の側面も見られた。それは正規の修業年限３年では、博士論文を完成し、学位を取得することは極めて困難であるということである。

参考文献

Berelson, B. (1960) *Graduate Education in the United States.* New York : McGraw-Hill.

Bowen, W. G. and Rudenstine, N. L. (1992) *In Pursuit of Ph. D. Princeton : Princeton University Press.*

Clark, B. R. (1987) *The Academic Profession.* Berkeley : University of California Press.

Clark, B. R. (ed.) (1993) *The Research Foundations of Graduate Education.* Berkeley : University of California Press.

Clark, B. R. (1995) *Places of Inquiry. Research and Advanced Education in Modern Universities.* Berkeley : University of California Press.

Fábri István and Varga Noemi (1999) *Hallgatók a Doktori képzésrôl. [Doctoral Students on the New Doctoral Courses.]* Budapest : Jeltárs. Jelenkor.

Noble, K. A. (1992) *An International Prognostic Study. Based on an Acquisition Model of Degree Philosophiae Doctor (Ph. D. Thesis).* Ottawa : University of Ottawa.

OECD STI. (1998) *University Research in Transition.* Paris : OECD.

Repo, M. (1970) *Who Needs the Ph. D.?* Toronto : University of Toronto Graduate Students' Union.

Smith, P. (1996) *Killing the Spirit : Higher Education in America.* New York : Penguin Books.

Szemerei, P. Dr. and Voros, F. Dr. (eds.) (1991) *Oktatasi kulonszam. [Special Issue on Education.]* Budapest : Bibo Istvan Szakkollegium.

Kozma Tamás (Ed.) (1993) : *Educatio-Felsôoktatás. [Higher Education in Hungary.]* Budapest : Oktatáskutató Intézet.

市川昭午・喜多村和之編『現代の大学院教育』玉川大学出版部、1995年。

（指導教官：山崎博敏）